

柏樹

川口市退職校長会
会報「柏樹」
第32号
令和8年2月1日

の家庭では、
祖母や子、孫
達が数人のア
ンドロイドと
楽しく共存し
ている様子が

退職校長会の未来は？

野本キミ子



大阪・夢洲に
到着。ホームも
階段も人、人、
流れに沿っ
て進むうちに万
博会場入り口へ。

待つこと1時間で「オーストラリア館」に。オーストラリアは、息子の転勤先だったので何度か行った。当時を思い出させるに余る内容だったが、なんと、音・光・映像によるものばかり。すべてが電気エネルギーに頼っていた。次の「国際赤十字、赤新月運動館」も世界中の活動の様子は音・光・映像を駆使したもの。各国の赤十字の活動の悲惨な状況を目にし、この活動が終わる日が早く来ることを願いつつ見ていた。

休日のためか、笑顔溢れる若者や学生集団があちこちに。彼らの未来の地球はと考えているうちに、ふと、仕事を思い出した。
私は今、ある専門学校で国家試験を受ける学生たちの手伝いをしている。彼等の中にはどの学年で学び損ねたか、基礎学力不足で専門科目の勉強どころではない者もいる。第二の彼等を出さないために何かしたい。
退職校長会の活動の重点に「学校支援、社会奉仕・・・」と大きく掲げてある。私は、これに何もして来なかったという後悔もある。支部によっては、市町村教委と連携した退職校長会も多くある。そういう会がますます発展することを祈る思いが沸き起こった。
アンドロイドに頼らずとも。

「現代」を考えるために

中川 弘 詞



21世紀を意識
するようになって
たのはいつ頃だ
ったろうか。

記憶を辿って
みると平成11年
頃から職員向けに「読書のすすめ」含めて便りを書いていたが、その中に「20世紀の時代を考えることが21世紀に結び付く」と訴えていたことを覚えている。教育改革が叫ばれた時代でもあったからだろう。

この感覚を持つに至ったのは、当時の10年ほど前に、チェコスロバキア（今のチェコ）を訪問する機会があったからだと思う。表立っては公式の訪問であるから学校訪問もあり、教育関係者とのレセプションにも応じなければならず、堅苦しい一面を持つ旅でもあった。
折角海外研修をさせてもらうのだから、国の様子や歴史を学ばせてもらった。訪問当時は書籍などの資料をいろいろ読んだり調べたりした。その中で、加藤周一の『言葉と戦車』や藤村信の『プラハの春・モスクワの冬』、『地殻の変動を見すえて』は非常に洞察力に優れた分析で、考えさせられるものであ

った。後ほど、チェコや東欧・ロシアなどに關しては多くの書籍や資料が出版され閲覧できるようになった。「時代」をよりはつきり究明できるようになったのである。

このようなことが契機になって、退職後、もう少し勉強しようと大学の公開講座やカルチャーセンターなどに足を運び、現代史を学び始めた。国際政治学者の藤原帰一やフランス現代史研究に取り組む渡邊啓貴など、大学の先生の話を聞くようになった。時として、ドナルドキーンらの講演会にも参加することができた。講師の先生の話を聞き、関係の資料としての著作物を探すために神田の古書店巡りをして、書物を購入した。実に楽しい時期であった。しかし、世界的な「コロナ感染」の影響で多くの講座が休止になり、再開してもリモートで過ごすことも多くなった。それを機にすっかりカルチャーセンターには出向けなくなってしまう。残念なことだ。

21世紀を意識するようになってから、新聞のスクラップを始めた。世界の政治動向30年分が資料として集まった。そのスクラップを「国際政治詳細史」として、パソコンで整理している。21世紀の4半世紀になり一区切りになる。欧米や日本も含め新しい時代の新しい動きを分析し、「現代」を考えていこうと思っっている。

— ちよつとい話 —

ほぼ農業

加藤 裕

群馬県に畑を借りている。妙義・榛名・赤城の上毛三山に囲まれた台地にある「甘楽ふるさと農園」という場所。

この利用ルールは、無農薬・有機栽培。それ故の工夫も楽しんでいる。

〈虫との戦い〉

殺虫剤は使えないので、虫は手で取る。里芋・こんにやく・ごまが大好きなスズメガのデカイ幼虫が目の前に現れると流石にゾクツとする。じゃがいもやナス科に付くニジユウヤホシテントウの卵塊を見逃すと、あつという間に百匹以上の幼虫にボロボロにされる。種類ごとに特定の虫が付くが、多少は虫にやるつもりでいると気が楽である。

〈益虫を増やす〉

害虫が来ればそれを捕食する益虫も来る。てんとう虫・クモ・カマキリは特に可愛がっている。クモが巣を張り易いように周りに支柱を立ててやる。日々この虫達が働いてくれている。

〈鳥・獣との戦い〉

トウモロコシ・落花生・西瓜等、ちよつと熟す頃になるとやられる。穴熊・カラス・鹿の仕業。厳重にネットをしているが、発芽したトウモロコシの芽

をきれいにキジに食われたことも。かわいい足跡がすっかり残っていた。

〈虫や獣が嫌う植物を植える〉

キャベツ等のアブラナ科とレタスの混植、畝の近くにマリーゴールド、アブラムシを引きつける麦、獣が嫌う唐辛子を植えると効果があるよう。

〈苗作り〉

直播きする根菜類・菜っ葉類以外の40種程は自宅で種を蒔き、苗を作る。水やりし易く、2・3月は暖かい部屋7・8月には冷房の効いた部屋で発芽させ、日の当たる室内で苗を育てる。寒さや暑さのため、畑では発芽が難しい時期にもよく育つ。

〈土作り〉

植物が水・栄養・酸素を取り入れる土は最も大切。堆肥・石灰は定期的に入れる。米糠・卵の殻も大事な肥料。

〈蒔き時・植え時をずらす〉

同じ作物は一斉に収穫期を迎える。少量ずつ採れるよう、2〜4週ずつずらして種まきをする。同じ野菜ばかり食べるのはやや辛いので。

〈終わりに〉

熟したトマト・苺・西瓜をその場で食べるのは実に美味い。収穫した大量の野菜を処理・保存するのも手際よくなってきた。自分で作った野菜は健康にも良いはずと信じ、暑さ対策を工夫しながら励んでいる。子どもと同様生き物を育てるのは難しくも、楽しい。

感動の再会

岩田 直代

ブロードウェイミュージカルの傑作「コーラスライン」の東京凱旋公演を今秋観る機会がありました。

初演は1976年、日本では劇団四季により1979年に開幕。開幕当時高校生だった私は、斬新な脚本や煌びやかなセットのないむき出しの舞台、そして個性豊かな俳優陣の熱気に圧倒されました。

作品の根幹は、名もなき脇役の選抜オーディションに挑むダンサーたちの赤裸々なモノローグです。華やかな夢だけでなく、誰もが抱える不安や苦悩、舞台上に賭ける覚悟と、それを乗り越えようと果敢に挑む姿の先にある「人生讃歌」を描いています。人種やジェンダー、格差問題も織り込まれた脚本は当時としてはかなり踏み込んだもので、映画化もされ評判を呼びました。ゴードルのタキシードに身を包んだダンサー達が、「誰もが輝ける一人の人間」である」と高らかに謳い上げるラストシーンは、脚本の持つ重いテーマを見事に昇華させる強さがありました。

初演から半世紀を経た新たな演出では、ジェンダーや人種問題等への、時代を経た意識の変容や多様性が、より色濃く俳優陣にも反映されており、

女性のセリフも、より力強くなっていると感じました。

舞台の隅々に至るまで、過去の公演との変遷を噛みしめながら、心ゆくまで鑑賞しました。そして迎えたラストシーン。身体中から沸き上がる感動は、かつての若い魂の熱狂とは異なる、魂の奥が震えるような深い感情でした。

良き作品は時代を経ても色褪せず、また、人生における経験の全てが、感動を深める原動力になることを実感しました。遠き感動との再会の素晴らしさと、年齢を重ねる豊かさの喜びを改めて感じました。

終演後には、演出家役を務めたバレエ界の異才、マルチアーティストのアダム・クーパー氏と交流する機会にも恵まれました。その場面で一人の高校生が「今の成功の目標はいつ、どのように決めたのですか？」と、頂点を極めた成功者としての問いを投げかけました。それに対しアダム氏は「まだ、目標は模索中です。登山の最中です。」と静かに返答されたのです。

御年54歳にしてなお、「未完の挑戦者」であり続けるその飽くなき向上心と挑み続ける情熱に、私は今後の人生における確かな活力をいただきました。この感動を忘れず、謙虚に、そして愉しみながら、私もまた「日々是新」の精神で、第二の人生を歩んでいきたいと思えます。

日々雑感

不登校を考える

柴田 宏之

通信制高校の仕事に関わるようになって5年になります。中学校入学から高校卒業までの6年間という長いスパンで子どもの成長を考えるようになりました。勤務校は中学校時代に不登校だった生徒が7割を占めています。しかし、多くの子どもたちは、中学卒業を機に新しい環境で自分のペースで学びながら不登校を乗り越え卒業していきます。卒業文集にはその成長の軌跡が記されています。2年前に卒業した男子生徒の文集の抜粋です。

「中学2年の秋、不登校になりました。理由としては人間関係、学力の低下、親の教育に対する疑問など色々積み重なったのだと思います。両親や中学の友人に沢山迷惑をかけました。中学3年の6月にフリースクールに通うまでの半年間、色々なことを考え、思いめぐらし、自分を見つめ直すキッカケとなりました。これまでの人生で一番苦しく、成長できた半年だったと思います。：フリースクール続きで通信制高校に通うことになりました。：様々な友人、両親、先生に支えられ、今では電子工学を学びたいという夢を持ち大

学受験までしています。：生きる気力すらなかった辛く苦しかった中学時代、かけがえのない最高の友人、こんなに嬉しい勝手の悪い自分自身、今までの嬉しかったこと、悲しかったこと、それら全てが今の自分を作る宝物です。」

調査結果を見ると、不登校は小学校6年から中学校2年の間に急増します。この時期は思春期の始まりと重なっています。思春期を迎え、子どもたちの心の中に自分を見つめる「もう一人の自分」が育っていきます。見え始めた自分をやけにみずぼらしく感じるかもしれません。でも生まれ変わることはできません。くじけそうな自分を励ましながら、自問自答しながら、自立への坂道を登っていきます。その坂道の途中で、誰でも程度の差はあれ、壁にぶつかり迷ったり躓いたりします。どの子も自分や将来に対する不安を抱えながら、若さで思春期を乗り越えていきます。

中学生の不登校は、この人間的成長の過程の中で起きてくるのです。子どもが自分を見つめ、自分にとっての学校に行く意味を問い直すために必要な時間なのかもしれません。現在、市内の中学校で不登校生徒の保護者支援にも関わっています。学校で学ぶ意味、学校を休む意味を考えながら、保護者や子どもたちと向き合っていきたいと思えます。

自然の中で

戸谷 弘幸

令和4年3月末に定年退職を迎え、翌日の4月1日より現職の川口市立水上少年自然の家副所長の職に就きました。現地でまず驚いたのが朝と晩の気温差が大きいこと、一日に何度も天候が変わること、人が歩いていないこと、自転車に乗っている人がいないことなど、川口での生活とは全く違うところでした。また、私自身にとっては、大学生時代の合宿所生活以来、45年ぶりの単身生活となりました。掃除・洗濯・買い物・食事・お風呂等、すべて自分でこなす生活となりました。

現在、水上少年自然の家は、川口市の中学2年生を対象として一校2泊3日で自然教室を実施しています。各校が、それぞれのスローガンや目標を掲げ、事前の研究や準備に余念がありません。各校の主担当には若手の先生方も多く、指導者講習会や各学校単位での下見等、とても意欲的・積極的に取り組んでいた頭が下がります。2泊3日の概ねの行程は、1日目がウオーケラリー・体験活動、2日目が一ノ倉沢・天神平へのハイキング、3日目が諏訪峡・清流公園散策となります。自然の家での生活は、入所式にはじまり、レクリエーション、入浴、食事、

キャンドルファイヤー、大掃除となります。その中で各校が工夫を凝らし特色のある取組を見せてくれます。中には校長先生自ら食事当番として活躍してくれる学校もあります。副所長として一番うれしく思うのは、すべての学校、すべての生徒が、来た時よりも明るく元気に楽しかったという表情と言葉にして帰ってくることです。自然教室を通して何か一つでも学校・学年集団の成長に役に立ってくれば幸いです。

自然の家として、今年度は特に熊の出没対策に取り組みました。テレビや新聞で全国各地の熊被害が連日報道されています。自然の家として①職員による地域住民への聞き取り調査②川岳入山管理事務所との連携③みなかみ町獣害対策センターからの熊目撃情報の確認を毎朝実施しました。熊のほかにも猿・イノシシ・ニホンカモシカ・山鳥もよく見かけます。来年度も安心安全第一の下、自然教室実施計画を策定しているところです。

私は、自然の家に来て4年目になりますが、みなかみ町には四季折々の自然を体感できる魅力があります。春の雪解けから新緑、夏の川や湖での体験秋の紅葉、冬のスキー・温泉など、是非一度訪れて頂ければと思います。終わりに会員の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈りいたします。

教育情報

「進んで学び、思いや考えを伝え合う
児童の育成」

「どの子にも「わかる」「できる」
「楽しい」が感じられる授業の創造」

川口市立芝中央小学校
校長 佐藤 元康

1 はじめに

本校は、令和5・6年度に川口市教育委員会の「学力向上」に関する研究委嘱を受け研究に取り組み、令和7年2月5日に2年間の成果を発表した。

2 研究主題

児童のつまずきを丁寧に解消し、どの子にも「わかる」「できる」「楽しい」が感じられる授業を積み重ねていくことにより、児童の主体性・自信を高めることができるように、研究主題「進んで学び、思いや考えを伝え合う児童の育成」を設定した。

3 研究の実践

(1) 研究構想

①仮説
○児童のつまずきを解消し、「わかった」「できた」「使えた」を積み重ねていけば、主体的に学び、自信をもって考えを伝え合う児童を育成できるであろう。

②視点

○視点1
個に応じた指導の充実

・つまずきの発見・解消
・実態に応じた指導と評価
・指導体制や補足的な学習の充実

○視点2

学習を生かして考えを伝え合う場の設定
・学習形態の工夫
・学習方法や学習ツールの工夫と充実
・板書とノート指導の工夫

○視点3

安心して学習に取り組み、着実に学びを積み上げる環境づくり
・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた「芝中央小スタンダード」の構築
・既習事項を生かした課題設定と見通しがもてる授業展開
・「わからない＝わかりたい」を素直に表現できる学級づくり

○視点1

【できたことをその場で評価】
何ができないのか、わからないのを見極め、指導・支援をする。少しでもでき、書けるようになったら、見逃さずにできたことに価値付けをした。書くことへの意欲が高まり、自分の考えをより詳しく書けるようになった。(1年)

○視点2

【自分の考えを持つ・伝える】
全員が解き方を説明することを目標とし、その解決に向けて全員が友達との交流を図った。全体の確

認の場では、複数人の児童が解き方を説明した。問い返して知識を確認したり、解法の仕方を少人数で共有したりすることで少人数クラスでの理解度が深まった。(5年)

○視点3

【クラス内習熟度別学習】
授業の途中やテスト前に①すいすい(発展)
②ぐんぐん(習熟)
③こつこつ(基本)の中から自分の理解度に
応じたコースを選び学習に取り組んだ。教え合い伝え合いをする意識を高めることができた。(6年)



4 研究成果と課題

(1) 成果

○児童アンケートにおいて、「学習が好き」、「自信をもって発表できる」と答えた児童の割合が大幅に向上した。教員が教材研究を通して進んで学び、導入の工夫・形成的評価・振り返りを充実させることで、子ども達も進んで学び、思いや考えを伝え合う姿に近づいた。

○宿題の量・授業の進め方(芝中央小スタンダード)・振り返りの視点などを教職員間で再確認することで、子ども達が安心して授業に取り組める環境を整備した。
○教職員での自主研修会を通して、教

員の得意なことを紹介し合ったり、互いに協働したり議論したりすることを通して、教員も自ら「進んで学び、思いや考えを伝え合う」ように努めた。このことにより、お互いに相談しやすい教職員集団に近づいた。

(2) 課題

○「わかった」「できた」「楽しい」がより感じられるように、学んだことを児童が実感をもって活用できる発表や表現の場を工夫していきたい。
○個に応じた指導をより充実させるために、教師によるフィードバックのほかに他の児童との学び合いの場を工夫し、互いに学び合っていく集団の精度を高めていきたい。

編集後記

会報「柏樹」第32号をお届けします。執筆をご快諾され、玉稿を賜りました皆様にご心より感謝申し上げます。

連絡網に関するアンケート調査について、ご協力くださりありがとうございました。幹事一同、調査結果に基づいて、今後一層機能的な連絡網を作成してまいります。

寒さが続きます。皆様にはくれぐれもお体にご留意ください。(滝澤 榮則)

川口市退職校長会ホームページ
<https://kawaguti-taishoku-koutyou.com>
QRコード等からご覧ください

